

社会理論の萌芽としてのハイエク心理学

— 進化概念と E. マッハの影響を中心に —

吉野 裕介*

Hayek's Psychology as a Seedbed of His Social Theory: Evolutionary Concept and the Influence of E.Mach

Yusuke YOSHINO

This paper aims to examine *Sensory Order* (1952) as well as the other psychological writings of F. A. Hayek and clarify the role of these writings in his entire work. Recently, some scholars have turned their attention to Hayek's *Sensory Order* (De Vecchi[2003], Caldwell[2004], Steel[2005]). However, what appears to be lacking is the reference to Hayek's evolutionary concept in his psychology and a focus on the background of his psychology.

In this paper, we will discuss the following two subjects. First, we will address the concept of sensory order and consider its relationship with Hayek's evolutionary concept. In Hayek's later social philosophical writings, evolution is an important concept. Accordingly, we will find an evolutionary concept in his psychological writings. Second, we will examine Hayek's career background. However, it appears that Hayek's psychology was influenced by Ernst Mach in that Hayek rejects Mach's positivism. Thus, an examination of Hayek's evaluation of Mach clarifies Hayek's methodological standpoint.

In conclusion, we would like to stress that Hayek's psychological writing is not independent but related to his social theory. Therefore, when considered from this perspective, Hayek's psychological writings can be interpreted as a seedbed of his social theory.

I. はじめに

II. ハイエクの『感覚秩序』

III. 『感覚秩序』にみる進化概念

IV. 『感覚秩序』成立の背景

V. 結語

I. はじめに

経済学者・社会哲学者ハイエクの多くの著作の中で、『感覚秩序』(1952年、SOと略記する)は、唯一の心理学的領域に関する著作である。これまでSO

は、ハイエクの他の著作と比べて、取りあげられることが少なかった。例えばクレスゲは、「(SOは)…ほとんど読まれることなく時が過ぎたようである。この本の重要性を意識しているハイエク研究者でさえ、それを読む義務に反する場合の方が多い」

(Hayek 1994: 26, 邦訳246) と評している。しかしながら、特にここ10年は、SOとハイエクの社会理論との関係についての関心が高まっているという。「かれら（注：ハイエク研究者）が『感覚秩序』へ注意を払い、精神過程におけるハイエクの洞察と社会システムの形成と進化に関するかれの思想との間にある関係を検討することに注意を払うことが増えてきたのは、ほんの過去10年間である」（De Vecchi 2003: 135）。

本論に入る前に、SOに関する先行研究について概観しておこう¹。日本において、SOの内容を紹介し評価した研究は、西山（1964）と上山（1989）がある。比較的早くから、SOと社会理論との関係を論じたものにグレイ（1984）や嶋津（1985）がある。グレイは以下のように述べている。「『感覚秩序』の議論の筋道を注意深く辿ることは、ハイエクの著作を適切に理解する上で、不可欠である」。また、「なんといっても決定的に重要なのは、この書で説かれている知識論は、ハイエクが経済理論や社会哲学の面で採るに至った多くの立場から推知されるものであるということだ」（Gray 1984: 邦訳13-14）。このようにグレイは、ハイエク体系におけるSOの重要性を指摘し、経済理論や社会哲学への影響を示唆した。ただしここでのグレイの考察は、これに留まるものである。

嶋津は、SOがハイエク体系における法理論の基礎をなすことに注目し、ハイエクの心理学は法理論の方法論的側面を表わしていると評価する。「一応は心理学として展開される理論は、二つの側面で社会と法の科学についての基本理論に関連する。一つは、社会の理論または認識の可能性とその限界を理解するという意味での社会科学のメタ理論（つまり社会の理論についての理論）という側面であり、もう一つは、社会科学の対象である社会を構成する個人についての基本的理解、または人間学としての側面である」（嶋津 1985: 43）。

最近の研究ではデ・ベッキ（2003）が、SOをハイエクの同時代の心理学や哲学の流れに位置づけた。それによれば、ハイエクがSOを書こうとした動機は、当時強い影響を与えていたマッハに対する反論に始まる。「かれ（ハイエク）は、マッハの貢献のなかで、理論的心理学と哲学的枠組みとを区別した」。そして「…哲学的レベルにおいて、ハイエクはマッハと自分自身とを区別した」（De Vecchi

2003: 137）。

さらにデ・ベッキは、ハイエクのSOがゲシュタルト心理学から受けた影響を強調する。かれによれば、ゲシュタルト心理学特有の他人の行動を「形態」として認識することが、ハイエクが採用した他人の行動のパターン認識に影響を与えているという。「ハイエクが採用した用語はゲシュタルト学派とのそれとは異なっているけれども、かれは他人の行動の知覚を、ゲシュタルト的知覚の典型的な特徴によって表現した。かれは、ゲシュタルト学派の『形態』を認識する能力と同様の『パターン』を認識する能力が、個人に備わっているとした」（De Vecchi 2003: 154）。

コールドウェル（2004）は、ハイエクにおけるSOの意義を、同年に発表された『科学における反革命』との関わりで、以下のようにまとめている。ハイエクは、社会は単純現象ではなく複雑な現象であるから、社会科学の目的は原理説明に留まるべきである、と考えていた。「かれ（筆者注：ハイエク）は、すべての科学の間で、基礎的に分かっ線は、自然か社会かにあるのではなくて、単純なものとして研究されるか、複雑現象として言及されるか、にあると結論づけた」（Caldwell 2004: 249）。コールドウェルによれば、複雑現象としての自生的秩序に関する研究の例として、SOのような心理学的研究があったのである。「SOは、いかにして複雑な自生的秩序が存在しうるかに関する例にとっても、さらなる例の発見のためのはずみにとっても、かれの後期の著作のなかで大変大きな役割を果たすようになった」（Caldwell 2004: 240）。

スティール（2005）は、特に、ハイエクの心理学で示されている「神経生理システム」とかれの社会哲学で示されているシステムの共通点を指摘する。なかでもかれの知識論は、かれの心理学、進化論、自由主義の三つに共通する知見であり、それがハイエク理論の中核を担っているとみる。「ハイエクの著作の価値は、人間の理解の心理学的制限に関する明白な考察が、情報収集過程として市場の役割と、道徳や政治的問題が進化する適応的枠組みのなかで理解されるところの市場過程と自由な社会との関係という広範な経済学の特徴を説明するところにある」（Steele 2005: 14）。

森（2006）においては、ハイエクが学生時代に残っていた心理学に関する草稿「意識の発生論に寄せ

て」を吟味し、20年後に書かれた感覚秩序との関係を探っている。この草稿の意義に関しては、これまでに十分明らかになっていなかった。それによれば、意識とは何か、記憶とは何か、というハイエクの関心は、学生時代から抱かれていたものであり、それに関して後に理論的な考察を加えたのが『感覚秩序』であるという。

本論文の目的は、SOとハイエク社会理論における重要な概念との関係について探ることにある。そのため、以下の二つについて吟味する。ひとつは、SOにおける進化概念についてである。後期ⁱⁱハイエク社会理論における重要な概念は、「自生的秩序」と「進化」の「双子の概念」であるⁱⁱⁱ。ハイエクは1960年以降明示的にこれらの概念を導入することで、かれの言う「設計主義」を退け、自由な社会を擁護する主張を展開した。近年指摘されてきたのは、SOと自生的秩序論との関わりである。つまり、人間の心の中に形成される感覚秩序と、社会において形成される自生的秩序の類似性を指摘し、ハイエク体系におけるSOは、自生的秩序論の基礎を提供している、とするものである。

本論文の考察で付け加えたいのは、以下の点である。SOに関するかれの知見と、かれの社会理論の方法論との間に、何らかの関係があることは、ハイエクがSOの執筆の動機を下記のように記していることから明らかである。「理論心理学について、私の考えを体系的に検討しなおすことを迫ったのは、社会的な理論の論理的な性格に関することがらである」(Hayek 1952b: v、邦訳3)。
それならば、かれの社会理論においてもひとつの重要な要素である進化的な概念を、SOの中に見て取ることはできないか。

今ひとつは次の点である。ハイエクをして心理学的な著作を書かせたのは、いかなる動機によることであろうか。これを、かれが青年期を過ごしたウィーンの知的状況にあって強い影響力を持っていたエルンスト・マッハとの関連によって吟味する。

SOは、その領域としてはハイエクの著作の中で異色である。しかしながら、それが基礎としておいている方法論的立場については、かれの社会理論と無関係ではない。かくして、かれがSOを書くに至った背景を吟味することで、ハイエクの方法論がより鮮明に浮かび上がるであろう。

本論文においては、上記の問題意識から出発し、ハイエクのSOに見られる進化概念について検討する。これにより、後期ハイエクの社会理論における進化概念の萌芽が、『感覚秩序』に見られることを確認する。かれの進化概念が、明示的に述べられる^{iv}前から、その理論は進化論的要素を含んでいることが確認できるだろう。もとより、現在の心理学の成果に照らして、ハイエクの心理学を評価するだけの十分な知識は筆者にはない。本章の意図のひとつは、SO、および他の心理学的著作がハイエク社会理論の形成過程に与えた影響を考察することにある。今ひとつの意図は、ハイエクがSOを書くに至った背景や動機を検討し、ハイエク心理学の方法論的立場を明らかにすることにある。そのことで、SO執筆後展開されるかれの社会理論の基礎となっている、その方法論がより明確になるであろう。

手順を以下に述べよう。まずII章に、SOの内容を整理する。次にIII章では、SOが、ハイエクの社会理論に提供した知見、つまりハイエク心理学の進化論的含意について検討する。IV章においては、SOの成立過程やその背景について論じたい。最後にV章で、SOのハイエク体系における位置づけを探る。本論における考察を踏まえると、従来のハイエク解釈に何を付け足すことができるであろうか。

II. ハイエクの『感覚秩序』

1. 精神的秩序と物理的秩序

「心」の解明は、研究者にとって、長きに渡って興味を引くテーマであり続けている。心とは何か、または心はどこにあるのか、という問題－ハイエクが言い換えているところの「精神－身体」問題－は、ハイエクの時代にあっても、「伝統的な問題」であり、かつ困難な問題であった(Hayek 1952b: 1、邦訳9)^v。ハイエクは、SO出版後25年後に著した小論「25年後の『感覚秩序』」において、自らを「心理学に関する限り、実のところ、わたしは19世紀から来た幽霊である」(Hayek 1982: 287)と称している。そのハイエクが、あえてSOを著した動機は、この精神－身体問題に対して何らかの主張をすることであった。

ハイエクはこの問題に関し、まず以下のように対象を絞ることから始める。「ある生理的なインパルスが、中枢神経を通り、機能的な意味で、どのよう

にして他のインパルスとは異なるようになるのか、つまり、われわれは感覚のさまざまな性質がそれぞれ違っていることを承知しているのであるが、同じようにインパルスが区別されるのはどのようにしてであるか」。(Hayek 1952b: 1, 邦訳10, 強調は筆者)。この「感覚的な質」とは、「さまざまな刺激に対するわれわれの分化した反応のあらゆる属性や次元」(Hayek 1952b: 1, 邦訳10)を意味する。

ハイエクの考えるところ、世界には、感覚的な秩序と物理的な秩序が存在する。ここでの前者は「主観的、感覚的、感じられる、知覚される、日常の、行動的、現象的」なものを指し、後者は「客観的、科学的、『地理学的』、物理的、時には『構造的』」(Hayek 1952b: 4, 邦訳12)なものを指す。ハイエクの定義に従えば、前者のような感覚によっては規則性を的確に記述することが難しい事柄に対して、われわれの把握を助けるのが物理学の仕事であり、逆に物理的に把握できることを、われわれの感覚に与える影響を考察するのが心理学である。「われわれが知りたいことは、物理的な状況が現象的な絵に変えられる過程がどのようなものか」(Hayek 1952b: 7, 邦訳15)である。

ところが、行動主義の心理学は、両者を区別せず、精神行動のすべてを客観的に記述できる、との前提に立っている。「行動主義は、精神の問題を、独立または客観的に与えられる現象的な世界に対する個人の反応であるかのように扱った。しかし実は、主題を構成しているのは、物理的な世界とは異なる現象的な世界の存在である。行動主義は、精神の問題を現象的な世界での人間行動の研究に閉じ込めることで、また、精神の主要な現れを、説明すべき元というよりデータとして扱うことで、精神問題を避けてしまった」(Hayek 1952b: 28, 邦訳37)。ハイエクによれば、心の問題をすべて行動の問題に帰し、刺激に対する反応として人間を捉えることは誤りである。かれの考える「心理学」とは、認識や感覚といった概念を導入し、刺激が、それらに与える影響やそれらの形成過程を考察する。

ここで注意すべきは、二つの秩序の間での対応関係である。感覚秩序における感覚的な「質」と、物理的秩序における「刺激」とは、必ずしも一対一で対応しない。同じAという刺激から、A'やB'という別の感覚を引き起こすこともある。一方で、C'という感覚を引き起こすのは、常にCという刺激で

はなく、別のDの場合もある。「それぞれの感覚に対して常に一つの特異な刺激が対応しているという仮定は、はじめから用心して避けなければならない。いくつかの違った刺激が同じ感覚を生むことができるばかりでなく、多くの場合に、というよりもおそらく原則として、いくつかの違った刺激が、さまざまな受容器官に作用して、ある特異な感覚を生むようになっていると思われる」(Hayek 1952b: 6, 邦訳1)。しかし、精神世界を物理世界が常に対応すると考える「行動主義」的心理学によれば、刺激と感覚が一对一の関係にあるとされる。「(行動主義は)物理的に異なる刺激が異なる受容器官に作用しながら、同じ、あるいは似た感覚の質を生み、したがって同じに扱われるという事実が無視されている」。

ここで刺激は、それが感覚に与える効果を基準として、感覚秩序内部に配置される。その配置を決める関係こそが、感覚秩序における「分類」という機能である。

2. 神経システムの「分類」機能

ハイエクは、「分類」(classification)を、「…それぞれの刺激には秩序のなかで決まった場所が与えられる」ことであり、「その場所は、その刺激が他の刺激とさまざまに組み合わせられて生起するときに生体に対してもつ意味を表す」(Hayek 1952b: 42, 邦訳53)と説明している。

「刺激」について心理学的に述べるため、ハイエクが採用している神経システムのメカニズムを検討しよう^{vi} (Hayek 1952b: 55-58 邦訳67-71)。分類を行う機能を持つ器官は、神経システムであり、それはニューロン細胞の集まりであると考えられている。あるインパルス(電気信号)がニューロンに発生すると、別のニューロンへとインパルスが伝えられる。ニューロンとニューロンの間を媒介しているのは、実際にはシナプスであり、インパルスを受け渡している。

また、同じインパルスAを引き起こすインパルスBとCは、同じ効果A'を引き起こす時、同じクラスに属する。「同じ他のインパルスを喚起するあらゆるインパルス、あるいはインパルス群は、それらが共通の効果を持つから同じ『クラス』に属する」(Hayek 1952b: 68 邦訳82)。そして、同じクラスに分類されたインパルスは、結合したインパルスとみ

なされ、このクラスを象徴する存在となり、次に来るインパルスと関係を形成する。次に来るインパルスが共通したものであった場合は、それらとの関係は強まり、逆に異なるインパルスが来た場合は、それらの結びつきはまた違ったクラスを形容するようになるだろう。「他のインパルス間関係を表わすインパルスは、今度は、その次に来るものを獲得し、それによって、みずからの明確な機能的意味を得るだろう。次にくるものが共通することによって表わされる質は、最初のインパルス自体よりも、その間の関係に結びつくであろう」(Hayek 1952b: 73 邦訳88)。

このようにして、神経システムによって生じる分類は、感覚秩序の形成に貢献する。ここで導かれる含意は、次のようなことであろう。分類過程を経ることによって、外的な世界である物理的秩序は、個人の認知システムの選別、換言すれば解釈を経て、初めて感覚秩序として内的な世界に位置づけられることになる。それゆえ、物理的世界と内的世界、物理的秩序と感覚秩序は、一対一で対応する関係ではないのである。

またここで重要なのは、秩序内部における個別のインパルスは、常に関係性において意味を持つことである。「さまざまなインパルス間の結合の階層的組織の結果として、われわれが出発点とした一種の『関係』(すなわち、インパルス間の因果的な結合)は、複雑な構造を作り上げることに使われ、この構造について、さまざまな要素間にある多種多様な関係をいうことが正当であるといえる」(Hayek 1952b: 73 邦訳88)。

3. 「リンケージ」と「地図」の形成

先に述べたような「いくつかの求心性(注: 中枢神経システムへ到達しようとする性質)のインパルスが同時に起こることによる新たな結合の形成」をハイエクは、「リンケージ」と呼んでいる(Hayek 1952b: 104 邦訳122)。そして外的な刺激は、リンケージの働きを通じて、人間の中に取り込まれる。言わば、外的な刺激の記録が、人間の精神に刻まれる。かれは、この記録のことを、「地図」と呼んでいる。「…形成されるであろう結合のネットワークのなかでの関係や、それが再現しているといつてよい外的事象の構造を議論するにあたっては、ときには地図のような直接の比喩を使って、ある部分の物

理的世界に存在する関係を再現する」(Hayek 1952: 109 邦訳128)。

ハイエクは、精神的世界と、外界の物理的世界との関係について、刺激を中枢神経システムによって分類するという物理的な出来事が、人間知性にとっての精神的な感覚を形成すると考えている。かれはこれを、次のように例えている。「(人間の)感覚と知性の働きは、両者とも同じように、中枢神経システムによって行われる分類にもとづいていること、また、どちらも同じ連続過程の部分であって、その同じ過程によって、脳の中の小宇宙は外的世界の大宇宙の再現に次第に近づくことを、われわれは想定している」(Hayek 1952b: 107 邦訳126)。かくして、「地図」の形成は、人間がその内的な世界の中に感覚的な秩序を形成することを表わす。

感覚的な秩序は、外的なインパルスの関係を人間の神経システム上に表わすが、それはかならずしも外的な世界を直接に表わすものではない。ハイエクが感覚秩序を「不完全」なものであると称するのは、この意味においてである。「リンケージが中枢神経システムのうちに作り上げる秩序は、対応する物理的な刺激の間に存在する関係の再現としては、きわめて不完全であるばかりでなく、ある点では明らかに誤りでさえあることがある」(Hayek 1952b: 108 邦訳126)。秩序が「不完全」とみなされる原因の一つは、受容器官がインパルスを選択していることによる。受容器官は、ある刺激には敏感であるが、他の刺激には反応しないといった、選択機能を持っている。選択されて残ったインパルスだけが、リンケージを形成するのに貢献し、選択されなかったインパルスは、リンケージの性質に影響を与えない。このような選択によって、最終的にどのような外的事象が記録されるかは、生体の構造によって決まる。「受容器官は、…ある種の外的刺激にのみ敏感で、他の刺激には敏感でない。…最後にどのような外的事象が記録されるか、それがどのように記録されるのかということは、進化の過程で形成されている生体の構造に依存する」(Hayek 1952b: 73 邦訳88)。

このようにハイエクは、人間が外界の物理的な刺激を処理し、自らの感覚に表現するメカニズムについて述べた。外的な刺激がインパルスとなって、人間の中に入ってくる時、受容器官による選択を経て記録される。また、その記録は、そこに存在するリンケージ、すなわち前段階でのインパルスの結合と

の関係によって決まるから、それは時間を伴った繰り返しの過程を考えることができる。こうして、外的な物理的刺激的の秩序が、人間の内的な世界の感覚的な秩序に反映されていくのである。感覚秩序は、前もって形成されたリンケージと新しいインパルスとによって絶えず修正されていく「地図」にたとえることができる。ただし、どんなに秩序の形成が高度に進んでも、物理的世界を完全に反映することはない。「外的世界のさまざまな事象の間の関係の『地図』は、高次の神経中枢においてリンケージが次第に作っていくもので、きわめて不完全な地図であるばかりでなく、次第に変化するような地図でもある。それは、外的世界に存在する関係の一部を表わし、加えて、客観的に存在するものとは異なるものを表わす」(Hayek 1952b: 110邦訳128)。

「地図」に比喻される人間の認知は、ここでどのような意図を持っていると言えるであろうか。ここで、「地図」とは、主観的な解釈に基づいて、外的な世界を映し出す。それはもとある感覚によって様々に絵柄が異なる。また、完全に外界を反映させたものではない。それは、本来の地図が、もともとの世界を忠実に写し取ったものではなく、作成する人間・手法によって種々のデフォルメを経由することを考えてみればよいであろう。そして「地図」は、人間の認知が次々と作り替えられていくことと同じように、次々と更新されていく。外界の様子が変われば、それに対応して形成される「地図」もその絵柄が変わるのは、本来の地図も同様である。そして、実際に地図をたよりにわれわれが旅をするのと同様に、リンケージと結合するインパルスが形成されていく際、人間の認知に存在する「地図」が前もっての枠組みを与え、それに基づいて新しいインパルスが位置づけられるのである。

先に、ハイエクがSOを執筆した一つの動機として、行動主義への反論があったことを指摘した。上で概観したハイエクの心理学は、ここでどのような意味を持つであろうか。

ひとつには、その人間観である。行動主義の心理学が想定する人間は、刺激に対する反応のみが行動として現れる。しかしここで登場するハイエクの人間観は、常にその認知システムを作り替えていく、ダイナミックな感覚形成を行なう人間である。もうひとつは、その学問の方法論に対する批判である。行動主義におけるような外から観察できるものだけ

を行なう科学は、客観主義の立場とってよいであろう。しかしながら、ここで指摘したように、ここでのハイエクの心理学は、人間が自ら行なう解釈、内観を基礎とする点で、客観主義とは異なる。ハイエクの心理学が示す、このような立場は、後に示すように、かれの社会理論の性格を、よく表わしていると言える。

Ⅲ. 『感覚秩序』にみる双子の概念

ハイエクはSOにおいて、進化 (evolution) という言葉を使用している (Hayek 1952b: 83 邦訳99)。しかしながら、ここでの使用は、生物の進化を説明するのに用いているだけであって、自らの理論を形容したものではない。本節において、ハイエクがSOで展開する理論に見られる、進化概念について吟味しよう^{vi}。ここで、「進化的」であることを示すために、以下のことを確認する。第一に、ハイエクの感覚秩序論が、変異・選択・遺伝によって特徴づけられること、第二に、時間的な累積過程を伴っていること^{vii}、第三に、その感覚秩序の形成が、全体として発展する方向に関して意図を持たない、つまり無目的なであること。

最初に、第一の点に関して、進化の三つの特徴、変異・選択・遺伝について順に確認しよう。神経細胞の受け取る外部刺激は無数に存在する。それゆえ内的な神経システムにおけるインパルスは、常にバリエーションが生まれている、多様な存在であると言える (変異)。インパルス群は、受容器官によって選択され、敏感な反応があるものは本来存在するリンケージと結合する。結果的にインパルスは、感覚秩序の形成に貢献するものが残され、そうでないものが淘汰される (選択)^{ix}。経験的に前もって形成されたリンケージには、それまでのインパルスに対する知覚が蓄積しており、新しいインパルスと組み合わせさせて、別のインパルスを形成することで、これまでの知覚を次へと伝達している (遺伝)。

このように、変異・選択・遺伝に特徴付けられるハイエク心理学における感覚の形成については、現在の進化概念、とりわけネオ・ダーウィニズム^xとして理解されている進化と類似的であると考えられよう。それゆえ、ここでは、ハイエクの心理学、とりわけSOにおける議論を、進化概念の萌芽が見られるものとして読める可能性を指摘することができ

よう。

次に第二の点に関して述べる。形成されたリンケージが、時間的に後から来たインパルスとの関係で、新たな感覚を形成する。そしてそれによって形成された感覚秩序全体は、刻一刻と変化する。このようなハイエクの説明は、時間的経過を考慮したものである。上記のような刺激の処理システムは、動学的な説明であって、静学的に記述できるものではない。また、「前感覚的経験」を元にして感覚の形成が可能であり、新たなインパルスと共に、また新たなインパルスが形成されていくから、それは累積的な過程である。

最後に第三の点に関して、感覚秩序と自生的秩序とのアナロジーを考えてみよう。ハイエクの社会理論における自生的秩序概念の要点は、以下である。自生的秩序とは、「自然」でも「人為」によるものでもない、社会システムの第三のカテゴリーである。自生的秩序内部において諸個人は、全体のことや他人への影響をすべて考慮して行動することはできない。諸個人の知識が行き届くのは、自らの行動と、せいぜい身の回りの範囲だけである。諸個人が可能なのは、行為の繰り返しとして存在するルールに従って行動することだけであって、全体としての秩序を形成しようとして行動するわけではない。またそれはハイエクの知識論から言えばそもそも不可能である。ただし、部分的な諸個人の行動が、全体として意図せざる秩序の発生につながっている。自生的秩序は、言わば状態を記述する用語であるため、それ自体ではある具体的な目的を持ったものではない。

ハイエクの述べるところの「感覚秩序」概念についても、同様のことが言える。インパルスとそれを選択する受容器官は、部分的に自らの機能に従っているだけであり、全体としての感覚秩序の形成に直接貢献しているわけではない。また、感覚秩序はそもそも、無意識の範囲を含むから、例えば人間が合理的に感覚秩序を設計すること、いわば自らの思ったように意思を作ること、不可能である。部分的なインパルスに対する反応が、全体としてみれば、意図せずして感覚秩序を形成することにつながっている。また感覚秩序自体が、ある目的や方向をもっているわけではない^{xi}。

かれは、SO執筆以降も、心理学的考察として、人間の認知に関する論文を著している。「ルール、

知覚と理解可能性」(1962)、および「複雑現象の理論」(1964)は、その代表的なものであり、SO以降の人間の認知と社会との関わりに関するハイエクの知見が示されている^{xii}。これらの論文において重要な点は、以下の二つである。ひとつは、ハイエクの考察の対象が、SOにおいては心理学における認知の問題、つまり個人から、社会哲学における社会にあって人間がいかにかふるまうのかに関する問題へと拡大・発展していることである。いまひとつは、後のハイエク社会理論における重要な概念、つまりルール概念や、進化概念が、その心理学的論考に見られることである。以下にその内容を検討しよう。

「ルール…」論文では、人間の認識を補完する役割を担う、ルール概念について、踏み込んだ考察をしている。以下は、ルールに従う行動をめぐる指摘である。ハイエクは、人間は、自らがそうしているとは知らない間にも、ルールに従っていると考える。このことについて、例を挙げることはたやすい。なるほどわれわれは言語を使うことができている、とひとまず言える。しかしながら、その言語に関して、単語や文法を、完全に理解しているわけではない。ハイエクの言葉では、以下のように述べられている。

「言語感覚 (Sprachgefühl) と呼ばれるものの本質が、まだ定式化されていない諸ルールに従うわれわれの能力にあるとすれば、たとえば、権利の感覚 (Rechtsgefühl) の本質も同様に、われわれが言葉にできるという意味で知っているわけではない諸ルールに従う能力にある、と考えるとならない理由は無い」(Hayek 1978: 45)。

つまり、われわれは言語同様、何が正しいと論理的に言語化できなくても、それに従う能力を備えているのである。ルールのメリットは、その存在を知らなくても、それに従うことができることを意味する。「われわれは、自覚的に語りうる以上のこと、いやさらにわれわれが気付いたり自覚的にテストしたりできる以上のことを、ある意味で常に知っている」(Hayek 1978: 60) のである。

心理学的考察において示されているルール概念は、個人の行動のみに意味を持つのではない。他人の行動を理解する上でも、重要な役割を担う^{xiii}。他人が共通のルールに従っているという事実は、諸個人が、他人の行動を認識する際に根拠となるものである。(人々の)「行為が諸ルールに従っており、また意味を持っていると認識するわれわれの能力は、わ

れわれ自身にこれらのルールが備わっていることを基礎としている」(Hayek 1978: 59)。換言すれば、同様のルールに従っているであろう、という予測が、他人の行動への「信頼」を生む、と言ってよいだろう。市場においてその行為者同士が抱くこの「信頼」は、ハイエクが考えるような、自生的秩序が成立し、それがうまくいっていることの根拠となるものである。論文「複雑現象の理論」では、繰り返し、個人の認識の限界が指摘されている。ただし、ハイエクはそこからさらに論を進め、その限界を克服するための社会理論の役割について説く。かれによれば、人間は、起こっている現象のすべてを認識することはできないが、パターンを発見することで、それに対処している。

「われわれの直感的なパターン認識能力がいかに驚嘆すべきものだとしても、それにはなお限界がある。われわれの感覚に訴えてくるのは、一定の種類の規則的配列だけなのである」(Hayek 1967: 122)。

そして、因果関係が単純な自然科学においてだけでなく、むしろ複雑な現象を扱う社会科学の領域で、そのパターン認識が有効になる。ハイエクが述べる「一定のクラスのパターンの出現の予測」は、「自然科学が扱う比較的単純な現象から、そのような特殊化が常に可能とは限らない生命・精神・社会というより複雑な現象へと向かう際に、はるかに大きな重要性を帯びる」(Hayek 1967: 123)。一定のパターンを予測することは、経済学的に言えば、特定の商品の価格や量を予測するために知らなければならないであろう、より特殊な知識には依拠していない。そのような個別の知識を手に入れることが困難な場合には「変数の特定の値ではなく、変数の範囲を決定する想定」(Hayek 1967: 130)が有効なのである。

では実際に、パターン予測を可能にする社会科学とは、いかなる理論がその資格を備えているのだろうか。パターン予測により規則性を明らかにしようとする理論、つまり、そのような規則性を常に明らかにすることが「可能である」と考える信念を、ハイエクは理性の思い上がりであるとする。また、例えば統計学のような学問を、ハイエクは、「膨大な数という問題を、複雑性を無視し、その数える個々の諸要素を意識的にあたかも体系的に連関していないかのように扱うことにより処理する」学問であるとして、その有効性を否定している。複雑な現象を扱う学問のあり方は、複雑現象を単純化したり、そ

のすべてを明らかにすることが目的であってはならない。もしそれが可能だと考えるならば、それは過った科学的思考である。

そこで、そのような科学的誤謬を避けた理論でありながら、パターン認識を可能にする理論として、ハイエクは、進化論を挙げる。

「大いに価値がある理論であるけれども、単なる一般的なパターンを記述しているに過ぎず、そのパターンの詳細をわれわれは決して充たせないというような複雑現象の理論、その最も適切な例は、おそらくダーウィンの自然淘汰による進化の理論であろう」(Hayek 1967: 127)。

ハイエクは、まず、ダーウィンの進化論を、以下のように定義している。

「伝達可能な変異と、よりよい生存機会を持つものだろうものの競争的選択とを備えた複製のメカニズムが、時の経過とともに、構造体対環境・構造体相互の絶え間ない調整に適應した、非常に多様な構造を生み出す」(Hayek 1967: 128)。

つまり、変異、選択、伝達に特徴付けられるような、時間的経過を伴ったメカニズムである。そして、パターンを記述することによって、起こりうる出来事の範囲を記述するのである。「まさにどんな種類の変異が可能性の範囲内にあるのか、どんな種類がそうでないかを、われわれに教えてくれるのは、進化論だけである」(Hayek 1967: 128)。

先にSOに見られる進化概念について指摘した。それに加えてハイエクがSO以来の心理学的著作にルールおよび進化概念を登場させていることは、後に展開するかれの社会理論にとっても意味を持つ。以下に整理しよう。

ハイエク社会哲学において、「ルールに従う行動」は、自生的秩序内部における個人がいかにふるまうかの問題を考える際、重要になる。ハイエクは、1960年『自由の条件』、1973-79年『法と立法と自由』において自由な社会のあり方についてより直接的に論じた。それらの著作で基礎となっている、自由な社会においてルールに従って行動する個人に関する知見は、かれが心理学的著作から考察を始めた人間の認知に基礎があると言えるだろう。またルール概念を導入することによって、後年ハイエクは、ルールの進化論をその社会哲学の理論的基礎として据える。この意味で、ハイエク社会哲学においてかれの心理学的著作とそれに関連する一連の論文が、重要

な基礎的および予備的考察であることが指摘できる。

かくして、ハイエクにとって心理学的著作は、次のような意義を持っている考えることができよう。ひとつは、自然科学と社会科学を結んでいる学問であること。もうひとつは、個人の行動を分析する哲学と社会の分析をおこなう社会哲学とを結んでいる学問である。そして最も重要な点は、ハイエクの心理学が、これらの領域を行き来するハイエクの著作活動において、ルールおよび進化という後の社会理論において頻出する概念を提供していることである。かれは、心理学的な考察から、社会理論にも応用可能な概念を練り上げていった、と考えることができよう。それゆえ、ハイエクの心理学と後のかれの社会理論とは密接な関係があると言えよう。

IV. 『感覚秩序』成立の背景

1. ウィーンの知的世界におけるマッハの存在

ハイエクをしてSOを執筆せしめた背景には、どのような事情があったのであろうか。SOは、かれの著作の中でユニークなものであるが、なぜそれを書かなければならなかったのであろうか。このことは、ハイエクの心理学の方法論を見る上で、重要な背景であろう。これらを検討するため、以下では、ハイエクが学生時代を過ごした、1920年代から30年代のウィーンの知的背景について、目を転じることとしよう^{xiv}。

かつてハイエクは、ウィーン大学の学生であった頃、自分の進路を決める時期にあって、心理学者になるか、経済学者になるか迷っていた、という。「(学生時代の)私の主要な関心は、長い間心理学と経済学との間で引き裂かれていたし、後には主に経済学へと向いたのである」(Hayek 1994: 62 邦訳44)。ハイエクは、大学時代、独学で心理学を学んだが、そのなかで大きく影響を持ったのは、かれがSOの前書きに以下のごとく記していることからわかるように、エルンスト・マッハ (Mach, E.) であった。「この本 (SO: 筆者注) の原点は、したがって、一時代前の問題の追及に戻る。1919年と1920年にウィーンで教えられることもなしに読んだ心理学は、私をこの問題 (心理学的問題: 筆者注) へ導いた。…私が知識を得た主な著者は、H. フォン・ヘルムホルツ (von, Helmwolz)、W. ヴント (Wundt)、W. ジェームズ (James)、G.E. ミュラー

(Müller)、そしてとくにE. マッハ (Mach) であった (下線筆者)」(Hayek 1952b: vi 邦訳4)。

ハイエクが学生時代を過ごした19世紀末から20世紀初頭にかけてのウィーンの知的世界において、マッハは、多大な影響力を持っていた。かれは、1895年から1901年の間、ウィーン大学の哲学講座の教授を勤め、いくつかの著作を残した。マッハは、自らが記しているように、物理学者として出発する^{xv}が、かれの著作は物理学に留まらず、哲学や心理学の分野にも大きな影響力があった。実際に、塩野谷 (1995) で示されているように、同時期にウィーンで青年時代を送ったシュンペーターも、かれの著作に強い影響を受けているし、相対性理論で有名なアインシュタインの理論も、マッハの著作からの影響が度々指摘されている。

様々な分野に及ぶマッハの影響力は、ハイエクと関連した分野、本論文の関心におけること心理学と経済学については、いかなるものであったのだろうか。以下に、ハイエクはマッハをどのように評価しているかについて吟味しよう。

2. ハイエクとマッハ

ハイエクは、1967年に記した小論「エルンスト・マッハ (1838-1916) とウィーン社会科学」において、マッハを以下のように記している。「マッハは、以降の時代もずっと、多くの心理学者が理解さえもしなかった、心理学の最も基礎的な問題の多くを観察した優れた心理学者であった。しかし同時に、かれはこれらの問題に有益な解決を与えることを不可能にさせるような哲学を有していた」(Hayek 1967b (1992): 171)。つまり、ハイエクは、マッハの心理学は受け入れつつも、哲学の面ではそれを拒否していた。ハイエクの心理学がその社会理論にどう影響しているのか、社会理論の方法論とどのような関係にあるのか、を見るには、マッハとの異同を整理することは有益であろう。

この問題について吟味するため、以下では塩野谷 (1995) によりながら、マッハのなした仕事について考察しよう。科学哲学におけるマッハの功績を、塩野谷は、以下のように四点にまとめている。それは、「(1) 科学の目的は思惟の経済性であるという見解、(2) 現象主義の認識論、(3) 道具主義の方法論、(4) 生物主義の知識理論」(塩野谷1995: 118)である。

このうち、ここで取りあげたいのは、(2)につい

てである。「現象主義の認識論」とは、塩野谷によれば、「現象の背後にある本質や因果関係についての形而上学的な想定を否定し、物理学の課題を、感覚経験を通じてわれわれに知られる「要素」間の関数関係の簡潔な記述にのみ限定」(塩野谷1995: 120)する。

マッハの物理学によれば、物体はそれ自身によって意味を持つのではなく、その物体の周りとの関係によって初めて意味を持つ、言い換えると質量を持つのである。マッハはその原理を、認識論にも応用した。マッハ自身の言葉によれば、「…相互依存関係の認識こそが(認識の)第一の基盤であり、…観察者各人の知覚は、相互に従属しあっているだけではなく、ある特別な様式で観察者の体にも依存している」(Mach 1923: 邦訳16)。このような、認識が感覚の関係性のなかで決まる、言い換えると物の認識はさまざまな異なる感覚の複合で決まってくるという知見は、マッハの認識論の特徴である。「物というのは、いうなれば、きわめて様々な感覚的印象の共同作業から生じ、相対的な恒常性をもってはたらく一定の現象複合体である」(Mach 1923: 邦訳16)。

脳科学者の茂木健一郎は、「認識におけるマッハの原理」を以下のように簡潔にまとめている。「認識において、あるニューロンの発火が果たす役割は、そのニューロンと同じ心理的瞬間に発火している他のすべてのニューロンの発火との関係によって、またそれによってのみ決定される。単独で存在するニューロンの発火には意味がない」(茂木2006: 65)。

ここで、「認識におけるマッハの原理」と、上に検討したハイエクの考えるニューロンの発火原理との共通点を見ることができよう。ハイエクは、ニューロン単独によっては意味を持たない、言い換えると感覚を生じ得ないとし、他のニューロンとの関係性によって初めて意味を持ち、ある感覚が脳の中に生じうる、というものであった。かれの関係性を重視する認識論は、ベッキも述べるように、ゲシュタルト心理学の影響を色濃く受けている。ただしゲシュタルト心理学自体がマッハの認識論に影響を受けたものであることから考えても、ここでハイエクとマッハの認識論に共通点を指摘することは可能であろう。かくして、上に示したように、ハイエクがマッハの心理学を評価するのうなずける。

ただし、その哲学的前提については注意が必要で

ある。マッハは、人々の持つ純粋な感覚が与えられているという前提から出発する。「人々は…出来合いの世界像を受け取る。…私どもが後に採る哲学上の見方もこれに他ならない。…私共が世界と呼んでいるものは、何はさておいても、もっぱら感覚活動の所産である」(Mach 1923: 邦訳9)。マッハの前提によれば、まず感覚があって、それに基づいて精神があり、その産物として世界の認識があるのである。しかしながら、ハイエクはそのようには考えない。感覚と世界の認識の間には、常に感覚から世界の認識へという方向でのみ関係が存在するのではない。既に指摘したのは、SOにおいて示されている、人間の内部の感覚と、その外部にある世界が、絶えず双方向で影響し合いながら、修正されていくような動的なメカニズムである。この点は、マッハの前提と異なる。

ここでの差異が生じる理由は、それぞれの専門分野と心理学の間に、どのような関係があるか、に関わる。マッハは、物理学と心理学の関係を捉え、その考察の対象を、観察可能な感覚に基礎をおくことができる、と考えた。「物理学と心理学とをこれらふたつの領域の基礎をなしている感覚的要素に還元することが、両者の関係を示すための最も簡単な手段である」(Mach 1923: 邦訳22)。しかしながら、ハイエクは、マッハの想定しているような前提となる「感覚」が、所与に与えられた世界を想定するのではなく、心理学と社会科学の共通の前提として、個人の有する「感覚」およびその集積としての「精神」が、外的世界の影響を受けて、相互に常に作りかえられていく形成される世界を前提としている。これが、心理学を評価しながらも、その哲学的前提については評価しないというハイエクのマッハに対する態度が生じた理由である。

マッハとハイエクは、自らの理論をより確かに根拠づける為に、方法論的問題、認識論的問題に立ち入らざるを得なかった。その際の大きな違いは、両者のバックボーンの違いである。マッハは物理学、ハイエクは経済学を含む社会科学である。物理学がマッハの意思表示のように「感覚」の分析から出発できるとしても、社会に関してはそれに値するものはない。ハイエク理論において個人は、切り離された存在ではなく、常に他者、および社会との関係性のなかにおいてのみ存在する。この意味で、ハイエクの考える社会科学は、いかに個人といえども、マッ

ハの「感覚」のように要素還元できるものではない。両者の専門分野の違いは、そのまま分析単位の違いに現われている。これこそが、ハイエクとマッハとを分つ大きな隔たりであり、かれがマッハを乗り越えようとした点であろう。

上に見てきたように、心理学、ことに認識論におけるマッハの存在は、ハイエクの心理学的著作の出発点となるものであり、その影響を見てとることができる。しかしながら、そのさまは、単なる継承というのではない。それは批判的なものも含む。かくして、ここで指摘したいのは、マッハの心理学に対する受容とその基礎に据えられた哲学的前提への拒絶、これこそがハイエク心理学執筆の背景にあったことである。

先に指摘した進化概念の萌芽との関わりで、特に付け加えておきたいのは、(4)「生物主義の知識論」についてである。マッハのこの考えは、ダーウィンの進化を肯定的に捉える見方である。ここで、上で指摘したように、SOに進化概念の萌芽があったという見解のもうひとつの根拠を補強することができる。つまり、SOがマッハの影響下において執筆され、そのマッハの知識論が進化的であるゆえに、SOにおける知識論も、人間の持つ知識が進化していくという知見に基づいた、進化的なものであることを示しているのである。

V. 結語

上で示したことを以下にまとめよう。まず、SOがハイエクの社会理論に与えた知見についてである。SOにおける「感覚秩序」概念は、これまでハイエク研究者に指摘されてきたように、かれの「自生的秩序」概念と相似的な関係にあるだけでなく、そこに進化的な要素を見て取ることができる。それゆえ、ハイエクが自覚的であったかそうでなかったかに関わらず、後のかれの社会理論における重要な概念、「自生的秩序」と「進化」の「双子の概念」の双方が、アイデアとしてSOに見ることができると言えよう。

ハイエクが進化論の摂取した過程については、スコットランド啓蒙の社会哲学、メンガー、在英時の当時の文化的進化論の影響が指摘可能である^{xvi}。さらに本稿で得られた知見を考慮すれば、ハイエクはSOの執筆を通じて、自らの理論に進化的概念を反映させていったのではないか。そしてここでの試み

が、やがて進化論について直接言及し、それを社会理論に適用した「ルール、知覚、理解可能性」や、「複雑現象の理論」、「行為に関するルールの体系の進化についての覚え書き」(1967年)や「法と立法と自由」(1973年、76年、79年)につながっていったと考えられよう。それゆえSOは、独立した著作ではなく、ハイエクの基礎的な概念がそこに詰まっているという点で、かれの社会理論と密接な関係にあることが確認できる。かくして、ハイエク体系において心理学的考察は、その社会理論の萌芽として位置づけることができる。

いまひとつ、SO執筆の背景を考察するなかで明らかになったことを以下にまとめよう。ハイエクが心理学に興味を持った学生時代、つまり1910年代から20年代には、当時のウィーン、およびウィーン大学周辺の知的状況にあって、マッハの思想は物理学のみならず、哲学、心理学など分野を横断し多大な影響力があった。

その後1952年に執筆されたSOは、学生時代のハイエクの論文にそのアイデアがあるため、内容にマッハの影響が感じられるのは不思議ではないだろう。ただし、ハイエクがマッハから継承した経緯は、単純なものではなく、受容している点がある一方で、それを乗り越えようとし、拒否している点がある。関係性によって人間の感覚が決まるという知見は、マッハの「現象主義的な知識論」を受け継いだものであろう。しかしながらハイエクは、マッハの心理学について継承し、関係性を重視する心理学を展開したものの、その哲学的前提、つまり分析対象としての個体の想定についてはこれを拒否した。これは二人の専門分野の違いでもあろう。しかしながら、マッハはあくまで自然科学者であり、その枠組みの中で人間の心理を探った。ハイエクは社会科学者であったことで、人間と社会の関わりの中で人間の心理を位置づけようとした。このような違いが、二人の心理学のアプローチの相違を生み出したのであろう。

本章の考察において明らかになったのは、ひとつはハイエクの心理学的著作が、かれの社会理論にどう影響したのかについてである。もうひとつは、ハイエクが心理学的著作を書くに至った背景を見ることで、その方法論的意義について明らかになった。

SOは、ハイエクの著作の中でもユニークかつ重要な著作であるが、同時に評価の難しい著作でもあ

る。さらに、現代の認識論、認知心理学の成果も考慮せねばならない。また、いくつかの研究は、SOの現代的意義を、神経生理学や神経経済学、行動経済学の先駆者として指摘している^{xvii}。これらに関しては、引き続き吟味されねばならない問題であろう。^{xviii}

参考文献

- Caldwell, B.J. (1988) "Hayek's Transformation", *History of political economy*, vol.20(4), 513-41.
- (2001) "Hodgson on Hayek: a critique," *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 25, pp.541-555.
- (2004a) *Hayek's Challenge*, Chicago university press.
- (2004b) "Some Reflections on F.A. Hayek's The Sensory Order," *Journal of Bioeconomics* vol.6 pp.239-254.
- de Vries, Robert (1994) "The Place of Hayek's Theory of Mind and Perception in the History of Philosophy and Psychology", In Hayek, *Co-Ordination and Evolution: His Legacy in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, edited by Jack Birner and Rudy Van Zijp.
- De Vecchi N. (2003) "The Place of Gestalt Psychology in the Making of Hayek's Thought", *History of Political Economy*, vol.35, 1 Duke University Press.
- Feser, E.(ed.) (2006) *The Cambridge Companion to Hayek*, Cambridge University Press.
- Fleetwood, S. (1995) *Hayek's Political Economy-the Socio Economics of Order-* London, Routledge (佐々木 憲介・西部 忠・原 伸子訳『ハイエクのポリティカルエコノミー-秩序の社会経済学-』法政大学出版局, 2006年)。
- Gray, J. (1984) *Hayek on Liberty*, Basil Blackwell (照屋佳男・古賀勝次郎『ハイエクの自由論』, 1985年)。
- Hayek, F. A.(1920) "Beiträge zur Theorie der Entwicklung des Bewußtseins", in Hayek archives, Hoover Institution, Stanford University, Box104, Folder 28.
- (1952) *Sensory Order*, London: Routledge (穂山貞登訳『ハイエク全集 4 感覚秩序』春秋社, 1989年)。
- (1960) *The Constitution of Liberty*, University of Chicago Press (賀賀健三・古賀勝次郎訳『ハイエク全集5,6,7 自由の条件 I, II, III』春秋社, 1986,1987,1987年)。
- (1967) *Studies in Philosophy, Politics, and Economics*, London: Routledge & Kegan Paul, ch.4, pp.66-81.
- (1967(1992)) "Ernst Mach (1838-1916) and the social sciences in Vienna", in Hayek [1992] University of Chicago Press, Chicago, p. 172-175.
- (1973) *Law, Legislation, and Liberty, Vol.1: Rules and Order*, Routledge & Kegan Paul (矢島鈞次・水吉俊彦訳『ハイエク全集 8 法と立法と自由1:ルールと秩序』, 春秋社,1987年)。
- (1976) *Law, Legislation, and Liberty, Vol.2: The Mirage of Social Justice*, Routledge & Kegan Paul (篠塚慎悟訳『ハイエク全集9 法と立法と自由2:社会主義の幻想』, 春秋社,1987年)。
- (1978) *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, London : Routledge & Kegan Paul.
- (1979) *Law, Legislation, and Liberty, vol.2: The Political Order of a Free People*, Routledge & Kegan Paul(渡部茂訳『ハイエク全集10 法と立法と自由3:自由人の政治的秩序』, 春秋社,1988年)。
- (1982) "The Sensory Order after 25 Years", In *Cognition and Symbolic Process*, ed. Walter Weimer and David Palermo, vol.2, pp.287-293, Hoover institution Press, Stanford UNIV., California.
- (1985) *The Essence of Hayek*, edited by Chiaki Nishiyama and Kurt Leube, Hoover Institution Press.
- (1988)*Fatal Conceit: The Errors of Socialism, The Collected Works of Friedrich August Hayek, vol.1.* London: Routledge.
- (1992) *The Fortunes of Liberalism: Essays on Austrian Economics and the Ideal of Freedom The Collected Works of Friedrich August Hayek, vol.4.* London: Routledge.
- Steele, G.R. (2005) "Psychology, social evolution and liberalism: a Hayekian Trinity", *Review of Political Economy*, vol.17(4), pp.1-16.
- Mach, E. (1922) *Die Analyse der Empfindungen und das Verhältnis des Physischen zum Psychischen* (須藤吾之助・廣松渉訳『感覚の分析』法政大学出版局, 1971)。
- (1923) *Populär-wissenschaftliche Vorlesungen, 5. vermehrte u. durchgesehne Auflage* (廣松渉・加藤尚武編訳『認識の分析』法政大学出版局, 1971年)。
- Nishiyama, C. (1964) "Hayek's Theory of Sensory Order and the Methodology of the Social Sciences", *The*

Journal of Applied Sociology. Vol.7.

Shand, A.H.[1990] *Free Market Morality: The political economy of the Austrian School*, London & New York, Routledge(中村秀一・池上修 訳『自由市場の道徳性』, 勁草書房,1994) ,

Kresge, S. and Wenar L. (1994) *Hayek on Hayek: An Autobiographical Dialogue* (嶋津格訳『ハイエク、ハイエクを語る』名古屋大学出版会, 2000) .

上山隆大(1989)「秩序論の背後にあるもの-F.A.ハイエクの『感覚秩序』をめぐる-」『思想』、778号、p.74-95.

嶋津格(1985)『自生的秩序』木鐸社。

塩野谷 祐一(1984)『価値理念の構造』、東洋経済新報社
----(1995)『シュンペーターの思考—総合的社会科学の構想』、東洋経済新報社。

進化経済学会編(2006)『進化経済学ハンドブック』、共立出版。

森 元孝(1995)『アルフレート・シュッツのウィーン—社会科学の自由主義的転換の構想とその時代』、新評論。
----(2006)『フリードリヒ・ハイエクのウィーン—ネオリベラリズムの構想とその時代』、新評論。

茂木健一郎(2006)『クオリア入門—心が脳を感じるとき』筑摩書房。

櫻井芳雄 (2005)「神経回路網による情報の表現」『哲学研究』、第578号、pp.1-22。

尾近裕幸・橋本努編(2003)『オーストリア学派の経済学』、日本経済評論社。

八木紀一郎(1988)『オーストリア経済思想史研究』、名古屋大学出版会。

----(2004)『ウィーンの経済思想』、ミネルヴァ書房。

吉野裕介 (2005)「F.A.ハイエクの主観主義—G.L.S.シャックルとの対比より—」『京都大学経済論叢』、第175巻第5・6号、2005年5・6月、pp.108-124。

----(2006a)「ハイエクにおけるルールを進化論をめぐって」『京都大学経済論叢』、第176巻第3号、pp.53-75。

----(2006b)「ハイエクにおける『自生的秩序』と『進化』の関係について—ハイエク文庫の調査から—」『21世紀COE京都大学先端経済分析ディスカッションペーパーシリーズ』、No.98。

渡辺幹雄(2006(1996))「ハイエクと現代リベラリズム—『アンチ合理主義リベラリズム』の諸相」、春秋社。

学会報告

Akiyama, M., and Egashira, S. (2006) “Ernest Mach and the Origin of the Knowledge Theory in the Former Austrian Empire”, Paper presented at European Society for the History of Economic Thought (ESHET)- Japanese Society for the History of Economic Thought (JSJET) 1st Joint Conference, Nice Sophia-Antipolis, Nice, France, Dec, 2006.

Schmidt, C.(2006) “Is Hayek a Precursor of Neuroeconomics? A retrospect view”, Paper presented at European Society for the History of Economic Thought (ESHET)- Japanese Society for the History of Economic Thought (JSJET) 1st Joint Conference, Nice Sophia-Antipolis, Nice, France, Dec, 2006.

* 京都大学大学院経済学研究科研修員, E-mail: yusuke-y@ijk.com

- i 本章の内容は、Akiyama & Egashira (2006)、Schmidt (2006)からも多くの示唆を得ている。特に前者の論文は、ハイエクにつながる知識論のオーストリア的（ウィーン的）伝統にいち早く注目している点で先駆的である。
- ii 一学者の知的な営みを、簡単に前期、後期と区切ることは難しさがつきまとう。しかしながら、本章においてはひとまず、ハイエクの長い生涯の中で経済学に取り組んでいた時期を前期ハイエク、社会哲学に関心が移行してからを後期ハイエクと呼ぶこととする。
- iii ハイエク社会理論において「自生的秩序」と「進化」が一对である必要性については、吉野(2006b)で検討している。
- iv ハイエクの進化概念に関する叙述が見られるのは、特に『自由の条件』(1960)以降の著作である。
- v 近年においても心と脳との関係を探る研究はたくさんにあるにも関わらず、「脳がどのように情報を操作し処理し生成しているか」という問題につながる成果、すなわち心に結びつく成果は、きわめて少ない」(櫻井2005: 1)。
- vi ここで述べたハイエクのニューロンの説明については、現在の知見に照らしてみても、ほぼ同

様のメカニズムであると言って良い。ただしハイエクは、シナプスが媒介される際に、興奮の信号のみを伝達すると考えているが、最近の研究では、実際には興奮を抑制する信号も伝えていることが明らかになった。「シナプスには次のニューロンの活動を促すもの（興奮性）だけではなく、逆に活動させにくくするもの（抑制性）もあり、この興奮性シナプスと抑制性シナプスの組み合わせにより、バランスのとれた複雑な信号伝達が可能となっている」（櫻井2005: 3）。

- vii ハイエクは、「…個体の遺伝的選択反応の過程は、特有の適応を示すのであるが、その過程とは区別されるのが『学習』である」（Hayek 1952b: 82 邦訳97）と述べている。ここで「分類」の対象は、意識的な刺激だけでなく、無意識によるものも含むため、それをもとにした感覚秩序の「進化」も、無意識的なものを含んだ進化であると考えられる。「感覚的な質による分類も、また意識的な経験に限らない。われわれは、自分も他人も、おおよそは意識的な行為ですのと同じ原則に従って、無意識の反応のなかで刺激を分類している」（Hayek 1952b: 23 邦訳33）。それゆえ、「動物が経験に基づき、最適な行動を選択する意思決定の過程」（岩波生物学辞典第四版: 205）である「学習」は、「進化」とは区別して考える。
- viii 岩波生物学辞典（第四版）によれば、進化は「生物個体あるいは生物集団の伝達の性質の累積的变化」（676）と定義されている。
- ix ここでは形成された結合が、個体発生によるものか、系統発生によるものかが曖昧であるが、ハイエクはこれを区別しないで考えている。「この神経システムの階層的秩序に多少結びついて、問題の過程の系統発生的側面と個体発生的側面との間、あるいは遺伝する結合と個体が獲得した結合との間には区別がある。しかし、われわれの知識の現状では、この問題について多くをいうことはできない」（Hayek 1952b: 81 邦訳96）。このことについて嶋津は、「…個体にとって生来的なものとは後天的なものとの境界をどこに求めるべきかという専門家の間での現在まで続く激しい論争に巻き込まれず、また当時の知識の限界から来るこの点での明白な誤りを避けることを可能にする」（嶋津1985: 25）ためであるとしている。
- x ダーウィン自身は遺伝子の存在には自覚的で

なかったため、ここで挙げた意味での進化とダーウィンの進化を混同してはならない。その後、ダーウィンの議論に遺伝子を考慮した進化学が発展し、それが現在のネオ・ダーウィニズムの主流となっている。これについては、例えば現在の進化経済学の到達点を整理した『進化経済学ハンドブック』を参照のこと。「つまりく変異・選択・遺伝」の三拍子によって進化が進むというのが、遺伝子によって補強されたネオ・ダーウィニズムであり、これが現代の正統的理論である（p.191）。

- xi このことは、自生的秩序および感覚秩序の双方が、無目的な行動や感覚から成立していることを意味するのではない。市場秩序全体を見てみれば、自生的なものから成り立っているのではないことは自明である。それゆえ、自生的秩序には、部分的な制度設計の余地が未だ残っているであろう。それと同様に、感覚秩序にも、無目的な反応から全体の神経システムが形成される一方で、意識的に獲得していく感覚（技能がその一例であろう）があると思われる。ただしここで強調しているのは、自生的秩序であれ、感覚秩序であれ、部分的な設計の部分があるからといって、全体の設計を初めから意図していたのではないことである。
- xii いずれも（Hayek 1978）に所収。
- xiii 吉野（2006a）では、市場において、ルール の存在を媒介することで、個人間の認識が間主観的および相互主観的なものとなるハイエクの方法論解釈を提示している。
- xiv この時代のウィーンおよびウィーン大学周辺の知的状況については、八木（1988; 2004）や、森（1995）に詳しい。
- xv 「私は哲学者でも物理学者でもなく、一介の物理学者にすぎないということであります。私が心理学…に眼を向けるようになったのは、認識論や方法論に関わるいくつかの問題に迫られてのこと」（Mach 1923 邦訳3）なのです。
- xvi ハイエク進化論の起源については、吉野（2006a）を参照されたい。
- xvii Chmidt(2006).
- xviii 渡辺の近刊(2006(1996))においては、初版において「宿題」であったSOに関する考察に取り組んでいるが、扱う問題が複雑すぎるため、方法論的な前提を素描したに依然留まっている、と述懐している。「複数の困難のゆえか、管見の限り、『感

覚秩序』についての包括的な研究は内外にも見当たらない。結局、本書もまたそれを断念し、その入り口に当たる方法論についての試論で糊塗するほかなかった」(渡辺2006: 567)。

(掲載許可2007年7月23日)